

あ
の
夏
の
ひ
と

岡
本
直
美

「さて、どこから話し始めようかしら」
扇風機の風が千鶴の襟足から伸びた細い白髪を揺らしている。
「話をするなら、そうね、私が初めてあの人を見た日にしましょうかね」
そう言うと、千鶴は居間の窓から島内の港のある方に目をやり、
「あの人を見たのは、私が十二歳、小学校最後の夏休みが明日から始まるという、七月の終業式の日だったわ。ふふっ、もう五十八年も前、随分と昔の話になるわね」
と、懐かしそうに目を細めた。
窓の向こう、夏の太陽に照りつけられた紺碧の海と真っ白な入道雲が見えた。

島内の小高い丘に小学校の校舎は建っていて、二階に六年生の教室があった。終業式の後、教室で通知表が配られ、担任の南先生が夏休みを過ごす上での注意点を黒板に書き出していた。黒板に書かれる南先生の少し丸っ

こい字を目で追う者もいれば、通知表を開いて心の中では小躍りしているような顔の子や、苦い漢方を口いっぱい含んでいるような顔の子もいた。その中で、ひとりだけ黒板も見ず机の上の通知表も開かず、後ろの席で開放たれた窓から外を見ている少女がいた。胸元の名札には『風間千鶴』とあった。

窓からは島の小さな港が見え、少し前に到着した定期船から乗客が降りてくるのが見えた。乗客の顔までははっきりとは見えないが、よく知っている島民なら背格好でどこの誰だか大抵は分かる。紫色のシャツの乗客は千鶴の家の裏に住む七山さんのおじさん、その後ろから船を降りてきた青の作業着姿の男性は千鶴の斜め前の席に座る葉山君のお父さん、それから続けて降りてきたのは大きな麦わら帽をかぶった楓さん。島の漁港で働いている。

乗客が降りるたび定期船が揺れた。楓さんが降りた後、釣り客が数人降り、その後ぱたりと途絶えた。もう全員降りてしまったのだろ

うと、千鶴が黒板に向こうとしたときだ。定期船からひとりの乗客が遅れて降りてきた。白いシャツが陽を受け、眩しいぐらいに輝いている。光のせいにか色褪せているのか白っぽく見える青色のズボンを穿いている。年は二十代ぐらいで体の線は細いが男性のようだ。肩にザックのようなものをかけ、荷物は少ないようだが旅行者だろう。島では見たことのない人だった。彼は定期船を降り、数歩進むと突然立ち止まった。千鶴は頬杖を突き、手のひらに顎をのせていたが、その様子が気になつて顎を上げ、首を伸ばした。青年はその場で腕をめいっばい広げると、天を仰いだ。まるで、その腕に夏の空を抱えるように。周りにいた乗客たちがちらちらと彼のほうを振り返っている。その場で何か声を発したようだ。千鶴は彼の言葉を想像した。「やつと着いた！」。いや、違う、千鶴はなぜか青年が「や」と、帰ってきた！と、そう声を上げたよくな気がした。

終業式からの帰り、あの青年を見かけた。自宅近くの角を曲がったときだ。青年は釣り客が泊まる民宿『あおば』に入っていくところ、千鶴はランドセルをカタカタいわせて小走りで『あおば』の玄関前に行くとき、ガラスの玄関戸から中をのぞいた。『あおば』の女将さんが奥から出てきて「いらっしやい」と言っている声がガラス越しに聞こえた。青年も何か言っているようだが声が小さくて聞き取れない。声の大きいおかみさんの「部屋？空いているわよ。畳敷きだけどいい？」というのが聞こえた。青年の形のいい頭が縦に動き、彼は靴を脱いで上がった。出されたスリッパを履いて一、二歩進むと何かを思ったようにふいに後ろに振り返った。千鶴は驚いて、その場から駆け出した。さっきよりもランドセルが大きく鳴った。それから『あおば』の前を何度か通ったが彼を見ることはなく、一週間が経った。千鶴はもう島を出て、帰ったんだと思っていた。

その日、千鶴は友人ふたりと海に泳ぎに行つた。海面から顔を出すと、青い空にまるで山のように聳え立つ真つ白な入道雲が浮かんでいた。

「だいぶ上手くなったじゃない」

同じく海面から顔を出した晴美が言った。晴美の向こうに沖に向かって伸びる防波堤とその先端に立つ赤い灯台が見えている。晴美は泳ぎが上手く、泳ぎが苦手な千鶴は晴美に時々教えてもらっていた。

「うん、何だかコツがつかめたような気がする」

ふたりの元にもう一人の友人の奈々子が平泳ぎでゆっくり泳いでくると、「ねえ、そろそろ帰ろうよ。お腹すいた」と、口をとがらせた。

「そうだね、お昼過ぎているもんね。いい？」

晴美が千鶴にも確認するように彼女を見た。千鶴はうなずいた。

「じゃ、戻ろう」

晴美の掛け声に合わせて、三人は同時に浜
に向かつて泳ぎ出した。ふたりに遅れないよ
うに千鶴も急いだ。と、千鶴は右足に違和感
を覚え、次の瞬間右足に激痛が走った。海面
から出ている千鶴の顔が痛みに歪んだ。動か
そうとする痛みが走り、千鶴は泳げなくな
り、一瞬にして溺れる恐怖に襲われパニック
になった。沈んでいく体を何とか海面に出そ
うと両手をばたつかせると、穏やかだった海
面に不穏な波が立った。千鶴が溺れかかって
いるのに先に気付いたのは晴美だった。彼女
はすでに足が着くところまで泳ぎ、立ち上が
っていた。視界の端に奈々子も立ち上がった
のが見え、千鶴はまだだろうかと振り返った
ときだ。晴美の心臓が高鳴った。
「千鶴！」
その叫び声に奈々子も振り返った。晴美は
すぐさま助けに向かった。しかし、それまで
波がなかった海面に急に波が現われ、行く手
をさえぎるように晴美の泳ぎを邪魔し、思う

ように進まない。焦る晴美の目に千鶴の姿が
どンドン小さくなっていく。そのときだ、防
波堤から誰かが弧を描くように海に飛び込ん
だ。

その人は決して泳ぎが上手いとはいえなか
ったが、晴美よりも千鶴に近く、すぐに海面
にふたつの頭が並んだ。晴美は「こっち！」
と右手を上げて叫んだ。島では見たことのな
い若い男性が応えるように手を上げた。

千鶴は意識がもうろうとする中、誰かの背中
に乗り、その肩に顔をのせているのが分かっ
た。もがいている間に体力を失った千鶴の体
はその背中にのしかかった。千鶴の重みで沈
みそうになるのをこらえながら、その人は海
面から必死に顔を上げて浜へ向かって泳いで
いる。「誰だろう？」と薄っすら目を開けると、
見覚えのある横顔が見えた。「まだ帰ってなか
ったんだ……」。こんな状況の中、ふとそんな
ことを思った。

「千鶴！」

と、呼び掛けられ千鶴は目を開けた。

「千鶴！　千鶴！　大丈夫？」

晴美の声だ。

「う、うん……」

千鶴はゆっくりうなずいた。晴美と奈々子は千鶴の顔をのぞきこむように膝立ちになっ
ていて、千鶴の返事に「ああ、良かった」と
全身の力が抜けたように砂浜に座りこんだ。
「私、どうやってここまで？」

千鶴は体を起こそうと横を向き、砂浜に手を
ついた。晴美が起こすのを手伝おうと背中に
手を添えてくれた。千鶴は「ありがとう」と
言って体を起こした。

「あの人、助けて」

と、奈々子は言いかけて隣の晴美を肘で小突
いた。

「あの人、大丈夫かな？」

奈々子の言葉に晴美が先に顔を上げ、千鶴
も遅れてふたりが見ているほうを向いた。

砂浜に終業式の日島にやってきたあの青年

が横たわっていた。千鶴はあっと思い出した。そうだ、この人に助けられたんだと、しかしそう思ったのも束の間、その様子がおかしいのに気付いた。青年の顔には血の気がなく、目を閉じ、ぐったりとして頭が傾いている。意識が無いようで、まぶたも指先もピクリともしない。すぐさま晴美が立ち上がった。「診療所の先生呼んでくる！ 奈々子も近くの誰か呼んできて！」

奈々子も「う、うん」とあわてて立ち上がる。とふたりは砂浜を駆け上がっていった。彼の胸を注視すると、まるで石のように動かず息をしていないのが分かった。死んでしまったの……？ 千鶴の体は震え出した。近づくのは怖かったが、四つん這いになって彼に近づくとその肩を揺すった。「ねえ、ねえってば、起きて。死んじやだめだよ！ 死なないで！」

千鶴は彼の濡れた肩を揺すった。そのとき、千鶴は彼の肩から突然アイロンをあてられた

ような熱さを感じ、手を離した。「なに？」と、その熱さに思わず声が出た直後だった。風もないのに彼の海水でびっしりと濡れた白いシャツが、簡単には揺れないであろうに、風に吹かれたように波うち、胸の辺りから金色の光りが浮かんできた。光りは何十個もの星を重ねたように眩く、彼の胸からまるで包み込んでいくようにその全身に広がり、白いシャツが金色に染まった。千鶴の顔も光に照らされ、彼の向こう、夏の海が暗く感じるほどだった。

「なに、これ……」

突然のことに千鶴はしばし呆然としていたが、はっとした。もしかして、これは魂が抜けようとしている瞬間なのかも。突飛な発想だとは思ったが、そんな現象にしか見えなかった。千鶴は彼の魂が抜けてしまわないよう、とっさに心臓を両手で押さえた。そこから抜けてしまうような気がしたのだ。千鶴の両手は光に包まれた。先ほどの熱さは感じなかった。

た。
「お願い。出ていかないで！」
そう言っつて胸を強く押さえると、突然彼が大きく息を吸いこみ、胸が膨らんだ。まるで大きな波のうねりのように、体全体がその瞬間、軽く持ち上がったように見えた。金色の光りはゆっくりと消え、彼のシャツは白色に戻った。さっきまで石のように硬かった胸が呼吸を始め、上下に動いていた。
「はあ……」
彼は息を大きく吐いた。生き返った呼吸ではなく、千鶴にはまるで深い溜息のように聞こえた。
「ありがとう。心配してくれて」
目を閉じたまま彼は言った。
「でも、心配することはないよ。僕は、死なないから」
彼は目を開けた。空を見ると、
「やっぱり……、死ななかつたな」
と、つぶやいた。

その日、千鶴は島の診療所で念のため一日入院することになった。病室の窓際のベッドに仰向けになり、茶色のシミがぼつぼつと浮かんだ白い天井をぼんやりと眺めていた。病室のドアが開くと、千鶴の視線はゆっくり天井を追ってドアのほうに下りた。病室に入つて来たのは先生の説明を聞き終えた千鶴の母親だった。同じ病室には数日前に入院した岩坂さんというおばあちゃんがいて、千鶴の母親が入ってくるなり、「良かったですね」と声をかけた。「ええ、本当ですよ」。母親はそう答えると岩坂のおばあちゃんのベッドの横で止まり、しばらく話しこんだ。ふたりの話題はもちろん千鶴が溺れかけ、無事に助かった話だった。

あの後、晴美は診療所の先生を、奈々子は近くをたまたま通っていた漁協の人を浜まで連れてきた。ふたりが戻って来たとき、彼はすでに体を起こし、膝を抱えて座っていた。晴美も奈々子もひん死の彼が起き上がっていない

るのに驚き、顔を見合わせた。晴美から聞いていた話とは違うことに困惑しながらも先生はその場で診療にあたり、青年には普通に民宿に帰っていいと言い、千鶴には入院するようになんと言った。このことが誰の口から広まったのか分からないが入院中の岩坂のおばあちゃんにまで伝わっているという事は、小さな島だ、どこまで広まっていることやら……。それを思うと千鶴は恥ずかしく隠れるように頭まで布団を被った。

「明日の朝、迎えに来るから。帰ったらお礼に行くわよ」

千鶴が布団を鼻の下までおろすと、母親が千鶴のベッドの脇に立っていた。

「お礼？」と聞き返すと、

「当たり前前でしょ。あのお兄ちゃんと一緒にお礼に行くわよ」

と言い、濡れた服が入った袋を持つと、

「じゃ、ゆっくり寝るのよ」

と、言って病室を出て行った。

千鶴は体を起こし、ベッドから降りた。布地が硬い病衣姿で窓の前に立つと、窓ガラスに自分の姿が水彩画のように薄く映り込んだ。言い方を変えれば亡霊のように見える。千鶴はあのまま溺れて死んでいたかとも思うと急に怖くなり、視線を外に向けた。陽は暮れ、外の街路灯に虫が群がっていた。窓を少し開けると風が入り、診療所の裏手に立つ木々が風に揺れる音が聞こえた。その葉音は浜に打ち寄せる波の音を連想させ、千鶴の脳裏に自然と浜辺でのことが甦った。

「死なないって？　どういうこと？」

千鶴は浜辺でそう聞き返した。青年は体を起こし、膝を抱えるように座った。

「言葉の通りだよ。僕はなぜか死なない。そういうふうに出てくる」

「そういうふうに出てくるって、そんな人いるの？」

「分からない。僕の他に会ったことはないけど」

「生きているってどれくらい？」

「百五十年ぐらいになる」

千鶴は訝しげに彼を見たが、さっき見た不可思議な現象を思い出すと嘘とも思えなかった。千鶴は彼の顔をまじまじと見ると「じゃ、いくつなの？」としわのない顔を見て聞いた。

「二十六。二十六のままだと思う。僕の間だけが進まないんだよ」

そのとき、後ろのほうから千鶴を呼ぶ晴美の声がした。千鶴が振り返ると、晴美が浜に降りこちらに向かって走ってきている。晴美の後ろに白衣姿の診療所の先生が見えた。

「このことは」と青年が言い、千鶴は彼を見た。彼はこう言った。

「このことは他の人には黙っていてほしい」千鶴は窓辺で「言えるわけがない」とつぶやいた。言ったところで誰が信じるというのだろうか。死なないひとなんて……。自分はきつとからかわれているんだ。でも、私が見たあ

の現象は何だったんだろう……。千鶴は窓に映る岩坂のおばあちゃんを見て振り返り、「あの、」と声をかけた。岩坂のおばあちゃんはベツドの上で正座になり、広げた新聞を前屈みになって読んでいた。顔を上げ老眼鏡越しに千鶴を見ると、「なんだい？」と穏やかな口調で聞いた。

「おばあちゃんは、その……、死なないひとっていると思う？」

「死なないひとかい？　ずっと生きているってことかい？」

千鶴は「うん」とうなずいた。笑われるだろうと思っていたが、岩坂のおばあちゃんは眼鏡を取り新聞紙の上に置くと、しばらく考え込んだ。千鶴は窓に背を向け、岩坂のおばあちゃんの答えをじっと待った。

「どうだろうね。私は会ったことないけど、いるかもしれないね。でも、きっと寂しいことだろうね」

「寂しい？」

「ずっと生きているってことは、自分だけが生き残っていくということだろうか？ どれだ
け別れなくちゃいけないかね」

千鶴は首を傾げた。

「千鶴ちゃんにはまだ分からないかもしれないね。ははっ」

岩坂のおばあちゃんはそう笑うとまた眼鏡をかけ、背中を丸め新聞を読み始めた。千鶴は浜辺での青年の顔を思い出した。そういえば自分の話をしている間、彼の表情はひょうひょうとしていたが目の奥はどこか寂しげだった。だから自分は冗談に思えなかったのかもしれないと千鶴は思った。千鶴はまた窓のほうを向いた。背を向けていたのは少しの間なのに、さっきより空の色が濃くなっていた。

翌日、母親と一緒に民宿『あおば』に行くと、千鶴は出迎えてくれた女将さんに「無事で良かったわね」と両頬を両手でなでられた。女将さんもやっぱり知っていた。

「あのお兄さんでしょ？ 部屋にいるから呼

んでくるわね」

そう言って、玄関のたたきに立つ二人を残して階段を上がっていった。千鶴が母親の後ろに隠れるように立とうとすると、

「ちゃんとお礼を言うのよ。命の恩人なんだから」

と、千鶴を前に立たせようと背中を押した。普段は瓶のふたも開けられないというのにこういうときの力は強く、千鶴は押されるがま前に立った。

階段が軋む音がして、先に女将さんが降りてきた。少し遅れて同じ軋む音が聞こえた。千鶴は思わずうつむいた。足音がふたりの前で止まり、うつむいている視線の先に上り口に立つ青年の素足が見えた。

「昨日は、どうもありがとうございます」

千鶴の横で母親が深々と頭を下げた。千鶴も慌てて頭を下げた。

「あ、いや、頭を上げて下さい」

千鶴はゆっくり頭を上げると彼と目があつ

た。
「退院したんだね。良かった」
そう言っただけは笑った。そのとき、奥から
女将さんを呼ぶ声がして「ちよつと」と言っ
て女将さんはその場を離れた。
「あの、体は大丈夫ですか？」
と母親が聞いた。
「大丈夫です。何ともないです」
「ああ、それは良かった」
母親と青年とのやり取りを聞きながら、千
鶴は彼を観察するようにジッと見ていた。
目に少しかかる長い前髪、目は細く、鼻筋は
通り、口は小さい。色白で頬は痩せ、体格の
いい島の漁師を見てきた千鶴には青年の体は
細く、ひ弱に見えた。これでよく自分を助け
たものだと思いつつ、同時に彼がいなかつ
たら自分はどうなっていたんだろうと思つと、
ぞつとした。千鶴の視線に気づき、彼が千鶴
を見た。千鶴の肩がビクッと震えると、彼は
面白そうに笑った。

「そういえば、君の名前をまだ聞いていなかったな」

千鶴の口が一本線のよう動かないのを見かね、母親が「ほら」と小突いた。

「千鶴：、風間千鶴」

「千鶴ちゃんか。僕は、木内清史郎といいます。よろしくね」

清史郎が千鶴と目の高さを合わせるように腰を曲げると千鶴は恥ずかしそうにうつむいた。清史郎は苦笑いを浮かべ体を起こした。

「木内さんは、いつまでこの島に？」

母親が聞いた。

「えつと、お盆過ぎまでは。確か、その頃に祭りがありましたよね」

「ああ、島の夏祭りね。以前にも来たことがあるんですか？」

「はい。確か、神社の前に出店が並んで、芝居小屋もありましたよね？」

千鶴も母親も眉間にしわを寄せ、顔を見合わせた。

「芝居小屋って？」

と、千鶴が小声で聞くと母親も首を傾げた。ちようどそのとき、女将さんが戻ってきて母親の様子に「なに、どうかしたの？」と聞いた。母親が清史郎から聞いた話を女将さんに言うと、

「ああ、そういえばそういうこともしてたわね。島の外から役者さんを呼んで、芝居小屋で見物したのよ。懐かしいわあ」

「でも、私がこの島に嫁いできてから、そんなこと一回もありませんけど」

「そりゃ、そうよ。もう四、五十年前のことだものよ。私がちようど千鶴ちゃんぐらいの年だったかしらね。でも、そんなことよく知っているわね」

女将さんが驚きと感心をもって清史郎に言う

「と彼は、

「以前来た時に誰かに聞いたのかな」

と、頭を搔いて笑いながらそう言った。何かごまかしているように千鶴には見えた。

それから数日、小さな島だというのに千鶴が清史郎を見かけることはなかった。民宿『あおば』の前を通っても、浜に行っても、商店に行ってもどこにもいかなかった。お盆過ぎまでいると言いながら、今度こそ本当に帰ったのかも、かもしれない、千鶴はそう思い始めていた。月が替わり八月になった。千鶴はその日、借りていた本を返しに行こうと学校に向かっていた。夏休みの間、月曜と金曜だけ学校の図書館が利用できた。容赦なく照りつける陽射しに、千鶴の額は薄っすら汗を掻いていた。雑木林に挟まれた緩やかな坂道を上がっていく途中、道に出来た日陰で足を止め、額の汗を手の甲で拭いた。道の両脇から蝉の鳴き声が響いている。千鶴が後ろに振り返ると、遠くに海が見えた。海のほうから涼しい風が吹いてくる。島の風は気持ちがいい。千鶴は風が吹いている少しの間、目を閉じた。風が止むと目を開け、手がかざした。千鶴には暑い陽射しも、海はまる

で真夏の光を喜ぶように輝いている。
周りの大人たちは千鶴が海に溺れかけたこ
とで、千鶴が海を嫌い、怖がるんじゃないか
と心配しているようだったが、千鶴は変わら
ず海をきれいだと思おうし、やっぱり泳ぎたい
と思った。自分の中に恐怖が残らなかったの
は、清史郎の身に起きたことのほうが強烈で、
自分の身に起きたことが薄まったせいではな
いかと千鶴は思っていた。それはそれで良か
ったのかも……。千鶴は本を胸の前で抱える
ように持ち直すと前を向いた。一步踏み出し
た足が「あっ」と驚いた声とともにすぐに止
まった。清史郎が坂道を下って来たのだ。ズ
ボンのポケットに手を入れ、日陰の中で薄暗
く見えたがこの前と同じ白いシャツを着てい
た。清史郎は千鶴に気付くと、ポケットから
手を出し「やあ」とその手を上げた。千鶴は
ぎこちなく頭を下げた。清史郎は千鶴の前で
止まった。今、考えていただけに清史郎の登
場にどきどきした。

「どこに行くの？」

「学校です。この本を返しに」

「そっか、本が好きなんだ？」

千鶴はうなずいた。清史郎の前髪の前髪の先が汗で濡れ、ところどころ筆先のように細くなっていた。千鶴は何をしていたんだろうと不思議に思っている。清史郎が、

「あのさ、千鶴ちゃんは万次郎さんって知っている？」と聞いた。

「万次郎さん？」

千鶴が知っている万次郎さんは島にひとりが住んでいた家から少し離れた、雑木林の中にひっそりと建つお墓の前だった。万次郎さんの名字は村瀬といい、古い墓石には『村瀬家之墓』と刻まれていた。それは万次郎さんが眠るお墓だった。

清史郎はそのお墓の前に立つと、「ここだったのか、灯台下暗しとはこのことだな、探し

でも見つからないわけだ」と、千鶴にはな
くまるでその中に眠る万次郎さんに語りかけ
るように言った。千鶴は首を傾げた。年
万次郎さんは去年の暮れに亡くなった。年
は七十代前半だったと思う。島の漁師で日に
焼けた肌は浅黒く、体は細かったが千鶴の目
から見ても海の男らしく強くて丈夫そうに見
えた。島の子どもたちにはわけ隔てなく接し、
千鶴にも会うと必ず学校のことや友達のこと
を聞いた。
去年の夏、万次郎さんに病気が見つかり、
一旦島を出て大学病院に入院した。しばらく
して万次郎さんの長男夫婦が万次郎さんを島
に連れ帰ってきた。千鶴はまた万次郎さんが
漁に出ると思っていたが万次郎さんの船は陸
に上がったまま、一向に漁に出る気配はなか
った。少しして千鶴は大人たちが「万次郎さ
んはそう長くないらしい」、「最期は島で過ご
したいと本人が言ったそうだ」と話している
のを聞いた。もうすぐ亡くなる人がいるとい

うのはまだ子どもの千鶴にはどこか怖く、島の道は大抵分かっていて、万次郎さんの家とその周辺だけ頭の地図からすっぽり抜けてしまったように、その期間千鶴は万次郎さんの家の近くを通ることが出来なかった。万次郎さんの家の近くに来るのは久しぶりで、こうしてお墓に来るのは初めてだった。可愛がってくれた万次郎さんを避けていた自分が千鶴は冷たい人間に思え、生きているときにどうして顔を見に行かなかったんだろうと、ごめんなさいと後悔が胸をよぎった。清史郎は膝を折り、お墓に向かって手を合わせた。千鶴もその後ろで本を脇に挟み、目を閉じ立ったまま手を合わせた。そのとき風が吹き、お墓の周りの木々がさわさわと揺れた。その音に千鶴は目を開け、顔を上げた。木々の葉が穏やかな波のように揺れていた。なんだか万次郎さんが応えてくれたような気がした。

清史郎は長いこと手を合わせていた。千鶴

はふと清史郎の肩が震えているのに気が付いた。清史郎は泣いていた。千鶴は驚き、気付いていないふりをするように一旦は顔をそらしたが、横目でちらりと見るとその後ろ姿が痛ましく見え、千鶴は前を向いて、「大丈夫？」と声を掛けた。清史郎は腕を上げ、シャツの袖口を引っ張って涙をふき、鼻にかかった声で「うん」と答えた。

「ずっと、万次郎さんのお墓を探していたの？」

千鶴は「探しても見つからないわけだ」と言った清史郎の言葉が気になっていた。

「ああ、新聞のお悔み欄で亡くなったことは知っていたんだ。島に来てからお墓を探していた。万次郎さんは海が好きだったから、てっきり海が見える場所だと思っていたんだ」

「万次郎さんをどうして知っているの？」

清史郎は屈んだまま振り返った。

「友達なんだ」

「友達？」

「万次郎さんが二十代の頃に会って、友達になつた」

嘘を言っているような顔には見えなかったが、それが余計に千鶴を困惑させた。

「信じられないのも当然だよね」

清史郎はそう言うと、

「ありがとう。案内してくれて。もう戻ろう。学校に行くんでしょ？」

と、言つて立ち上がり、来た道を引き返した。

千鶴は清史郎の後を付いて行きながら、胸の中のもやもやがどんどん大きくなるのを感じていた。本当なんだろうか？ からかわれてはいるだけなんだろうか？ とうとう立ち止まり、清史郎の背中に向かって、「本当なの？」と声を上げて聞いた。清史郎も立ち止まり、振り返つた。

「本当にずっと、生きているの？」

清史郎は「ああ」とうなずいた。

「どうして？」

「僕にも分らない。ずっと二十六で止まって
いるんだ」

「ずっと、死なないの？」

清史郎は肩をすくめ、「たぶんね」と答えた。

「どうして、私に話したの？ どうして二十
六のままなの？」

「僕の秘密を見られたから。嘘を言ってごま
かすことも出来たかもしれないけど、君が僕
を心配してくれたから。万次郎さんも同じだ
った」

「万次郎さんも秘密を知っていたの？」

清史郎はそれには答えず、「喉、渴いてな
い？ 来る途中にお店があつたね。ジュース
をおごるよ」と言つて歩き出した。

「ちよつと待つてよ」

千鶴は慌てて追いかけた。

商店で缶ジュースを二本買うと、千鶴と清
史郎は海へ行き防波堤に並んで座つた。防波
堤からはすぐ近くの灯台が見え、その近くで
釣りをしている人がいた。同じ宿に泊まつて

いる人らしく、清史郎が手を振ると、相手も手を振り返した。

清史郎から缶ジュースを渡されると千鶴は「ありがとう」と言って受け取った。清史郎はすぐに缶ジュースを開け、口元に持っていくと顎を上げてごくごくと飲んだ。よっぽど喉が渴いていたようだ。

「んー、美味しい！人間の發明ってすごいものだ。車を見たときも驚いたけど、缶ジュースもなかなかの發明だ」

「生まれたときはなかったの？」

「ああ、缶ジュースも車もなかった。僕は武士の家に生まれたんだ。お侍さんの子どもだったんだよ」

千鶴はまだ持っている本が歴史の本だったからどんなに良かったかと思った。千鶴がどんなことを聞けばいいのか迷っていると、清史郎は海を見つめながら話を始めた。

「子どもの頃はごく普通だった。親も兄弟もいた。戦もない世の中だったけど、今みたい

に医学は進んでいかなかった。僕が二十六のとき、病に罹り死を宣告された。けど死ななかつた。生還したんだ。同じ病にかかった弟は死んだが――

清史郎は淡々と言いながら、弟の話のときだけ一瞬目を伏せた。

「その年を境に奇妙なことが起きるようになった。次の年も重い病に罹り、今度こそ駄目だろうといわれても僕は死ななかつた。出掛けた道中、暴れた馬から落ちてそのまま崖から落ちても死ななかつた。普通なら助からないのに僕は助かった。初めはすごい幸運なんだと思っていたよ。それから、五年、十年経つても僕は若いまま、年をとらなかつた。自分の時間は止まっている。そう気付いたとき怖くなった。周りも僕を奇怪な目で見るようになった。家族だけが変わらずに接してくれただが、ひとまわり離れていた妹が明らかに僕より年が上に見えるようになった頃、このままでは家族も奇怪な目で見られるだろう、迷

惑をかける前にと家を出た」

「それからずっと家族には会わなかったの？」

「妹が僕を探し、会いに来た。彼女は白髪のお婆になつていたよ。妹は僕にこう言った。

『お兄さんの運命を思うと、可哀想でなりません。でも、人生を嘆かないで生きて下さい』

と。彼女と会ったのはそれが最後だ」

「そう言うと、清史郎は缶ジュースを一口飲んだ。

「いくつも時代が変わって、戦にも戦争にも行った。何度も危険な目にあつたがやっぱり死ななかつた。でも、不思議で仕方なかつた」

「不思議？」

「僕のように死なない人間ならまだしも、皆一度しかない人生、いつか終わってしまう人生だと分かっているのに、戦や戦争をして命を失つてしまふ。どうしてそんなことをするのか？ そんな時代に生まれた人たちが不憫でならなかつた」

清史郎の眼差しに千鶴は祖父や祖母のよう

な、さまざまのものを見て生きてきた人と同じものを感じた。外見は若い清史郎の内面はその見た目とは確かに年齢の差があるように感じた。

「ずっと、どうやって生きてきたの？」

と千鶴は聞くと、缶ジュースを一旦脇に置いて。

「この国には仕事場が沢山あった。山に町に海に。万次郎さんとは遠洋漁業の船で出会った。彼は『この仕事が終わたら島に帰って親父の跡を継いで漁師になる』と言っていた。僕は島に行ったことがなかったから興味を覚えて、いろいろ尋ねたんだ。そうしたら、島に来てみるかと誘ってくれたんだ」

「それでこの島に来たの？」

「ああ、万次郎さんが島に帰る日に僕も一緒に島に来た」

清史郎はその日のことを思い出した。

「僕は同じところには留まれないから今までいろんなところへ行った。渡り鳥のようにね。

いい町も村も沢山あったし、僕を怪しむ人もいたけど大抵の人は皆優しかった。でもこの島は今までの場所とは少し違った。僕は着いたその日に島を一日中歩きまわった。万次郎さんは呆れていたな。でも、ゆったりとした時間が流れ、何だか自分の中の流れる時間と同じような気がして、今までになく居心地の良さを感じた。定期船の船着き場から少し離れたところに集落があり、清史郎はその集落の中を歩いた。家々の前には漁で使う道具や網が置かれ、家の中からは魚を煮る甘い匂いがした。島の小高い丘にも上がった。丘の斜面に畑があり、畑仕事をしていたおばあさんがきゆうりをくれたのを覚えている。僕はこの宿命を背負っているから、なるべく人とは深く関わらないように生きてきた。本当に長く生きているのに僕のことをどれだけの人が覚えてくれているだろうかと思っほど、心を閉じひっそりと生きてきた。生まれ

た村ももう廃村になり僕には故郷もない。でも、故郷に帰ってきたようなそんな気がして、僕は日に日に自分から島の人たちに心を開いて打ち解けていった。島の人たちは素朴で優しく、働き者、万次郎さんの家族も温かかった。島の人たち、島の空気に僕の心はゆるやかに変わったんだと思う」

清史郎の声が波の音と重なって、穏やかに聞こえた。

「それに島のどこにいても海が見えるだろう。僕はね、他の人たちとは切り離された人生を生きている。ひとりぼっちのような気がしていたけれど、こうして海の上に浮かぶ島にいと、切り離されているんじゃない。きつと僕にしかない場所にいるんだって気がしてきたんだ」

清史郎は黙って話を聞いている千鶴の顔を見て、

「少し難しい話になってしまったね。千鶴ちゃんはこの島が好きかい？」と聞いた。

千鶴は初めてそんな質問をされた。自然と浮かんだのは「うん」という答えだった。清史郎は千鶴がうなずいたのを見て、「そうか」と微笑んだ。千鶴は、

「万次郎さんにはどうして知られたの？」

と聞いた。

「あれは、万次郎さんと万次郎さんの友人たちと海に遊びに行った日……」

清史郎は岩場に座り海を眺めていた。万次郎とその友人たちは海で泳ぎ、時折、清史郎に手を振り、清史郎も応えるように大きく手を振り返した。

清史郎はその日の海の色を鮮明に覚えていた。まるで、彼がその日の海に丁寧に色をのせて創り上げたように、細かな色の変化まで覚えていた。鮮やかな紺碧の海、遠くに向かうほど色味は増し、その先に浮かぶ別の島の周りの海の色もまた違っていった。清史郎は海を眺め、波音にかき消される小さな声だったが「きれいだ」とつぶやいた。

島に来てもう一か月ほどが経っていた。普段は万次郎と一緒に彼の父親の漁船に乗って漁に出たり、港の仕事を手伝ったりしていた。漁に出るときは必ず万次郎の母親がおにぎりを三人分握って持たせてくれた。清史郎は万次郎の両親といると自分の父母を思い出した。清史郎が目を閉じるとふたりの顔が浮かび、兄弟の顔、最後に見た妹の顔が浮かんだ。目の奥からじわりと涙がこみあげてくるのを感じ、誰も見てはいないと分かりながらも清史郎は片手で両目を覆った。その手のすき間を通して涙が頬をすーっと流れていった。清史郎は手を下ろすと鼻をすすった。そのときだった。叫び声が聞こえた。

「誰かが『万次郎！』と叫んだんだ。見ると、万次郎さんの姿が見えない。一瞬海面から顔が上がり、溺れかけているのが見えた」

千鶴は自分が溺れかけたときのことか、少し顔が強張った。

「友人たちが助けに向かっていたが、気が付

いたら僕も海に飛び込んでいた。体が勝手に動いていたんだ。僕は死なないから、僕が助けなくてはどう？

「恐くなかった？」

「恐くなかったよ。君のときもそうだ。恐くなかった」

「万次郎さんを助けたの？」

「ああ。彼を背負って砂浜に泳ぎ着くと、万次郎さんの息をすぐに確かめた。彼は息を失っていた。ほっとすると力が抜けて、僕も浜に倒れ込んだ。これも君のときと同じだ。他の友人たちは別の浜から上がったようにそこに僕は飛ばしかなかった。だから僕が万次郎さんだけを早く病院に連れて行かなくてはどう思ったんだけど、僕は気が遠くなっていくなか。これですべて死ぬのかなと思った。何だかそれはそれで哀しいなと思ったんだ」

清史郎は困ったように笑った。

「でも、体中が熱くなって、まぶたの向こうに強烈な眩しさを感じた。またかと思った。」

何度もあるんだ。今度こそは天国かと思つて目を開けると、やっぱり生きていた。君がああとき見たように光に包まれて。万次郎さんには意識が戻っていた」

「万次郎さんも驚いただろうね」

「万次郎さんはとても心配していた。僕が息をしていなかったから、僕を助けようと思つて、ふらつく頭で起き上がろうとしていた。そのときに光が発せられて、僕に起きた現象に呆然としていた。その時は何も聞かなかつた。その日見たことも誰にも言わなかつた」

その数日後、清史郎は万次郎と万次郎の父親と一緒に島の漁師たちが集まる宴会に参加した。漁師たちは皆、小麦色に焼け、笑う度に優しくげな目元に深いしわが表れた。やつと半分飲んでもすぐに酒が継ぎ足され、清史郎は久しぶりに顔が赤くなるまで飲んだ。漁師たちの顔が二重、三重に見え出し、清史郎は酔いを醒まそうと一旦外に出た。

潮の香りを含んだ夜風は心地よく、清史郎

は近くにあつた木箱を裏返し、腰を下ろした。
しばらくして、足音がして振り返ると街灯の
下に万次郎が立っていた。
「大丈夫か？」
万次郎が聞いた。もう二重には見えなかつ
た。
「久しぶりに飲んだんだ。でも、もう大丈夫
だ」
「親父も他の皆も酒に強いから周りも同じだ
と思つて、どンドン注ぐんだよ」
「僕も楽しくなつて、つい」
「そうか、それなら良かった」
万次郎は少し間を置いて、
「この前は何がとう。あのな」と言つた。
清史郎は何を言われるんだらうと不安にな
り、酔いが一気に醒めていくのを感じた。
「ずっと思つていたんだ。俺が見たものは何
だつたんだらうって」
万次郎は自分を気味悪がっているんじゃない
いだらうか？ そんな不安が清史郎の頭をよ

ぎった。清史郎は窮屈な場所に座るように肩を丸め、叱られる子どものように目をぎゅつと閉じた。

「でも、いいんだよ。なんだって」

万次郎の言葉に清史郎は目を開けた。

「お前も俺も助かった。それだけで充分だ。」

お前は俺の友達だから、何も気にしない」

清史郎は万次郎を見た。万次郎は夜風に体が冷えたように肩をすぼめ、

「俺、先に戻っているからな。お前も体が冷える前に戻ってこいよ」

と笑って言い、背を向けて戻っていった。

清史郎は安堵感よりも万次郎の言動を一瞬でも恐れ、不安に思ったことを恥ずかしく思った。友達なら自分から真実を言うべきだったのではないか、清史郎もそれを待っていたんじゃないかと思った。

「次の日、万次郎さんを釣りに誘った。僕は真実を打ち明けたよ。万次郎さんは驚いていた。でも、その日も次の日もいつもと変わら

ず接してくれた。僕の秘密を誰にも話さなかつた」

「万次郎さんは本当に友達だったんだ」

「ああ。『いっそのこと、ずっとここで暮らせよ』と言ってくれたけど、僕はいつかは島を出なくてはと思っていた」

「どうして？」

「僕は皆と違う時間を生きている。それは周りの人たちにいい影響を与えない。万次郎さんは『分かった』と言った。でも『ここはお前の島でもあるから、いつか帰って来い』つて言ってくれた。『約束だからな』って。そう言われたのは初めてだった」

そのときの清史郎の嬉しさが千鶴にも分かるような気がした。

「すぐにまた島に来たの？」

「いや、僕は一度行った場所にもう一度行くには、長い年月を経たないとダメなんだ。何か神様の思惑があるんだろうな。その地に行こうと思っても、道が無くなっていたり、島

に帰ろうと思っても港にさえ辿り着けない。船にようやく乗れても嵐に見舞われて引き返すこともあった。途方に暮れて、一日中海を眺めていたこともあった。自由なようで自由じゃないんだ。万次郎さんにもすぐには帰れないことを話していた。でも『帰って来い』と言ってくれた。僕は船を待った。例え何十年かかっても帰ろう。万次郎さんにもう会えなくても約束を果たすために帰ろうって。千鶴は遠くを見る清史郎の眼差しに彼がこの島を思い続けてきた長い年月を感じた。「また島を出たら、今度もいつ来られるか分からないの？」

「ああ、たぶんね」

千鶴は「でも、また来てよ」と言いたかったが恥ずかしくて、言い出せなかった。その代わり、「すぐに船に乗れるよ」と言った。

千鶴は結局本を持ったまま家に帰った。部屋の窓を開けると海に夕日が沈んでいくのが見えた。きれいだなと思いつながら千鶴はふと、

自分も約束をすればよかったと思った。

居間の柱時計がボーン、ボーンと鳴り、千鶴は視線を上げて時計を見た。針は十五時を指していた。

「あら、もうこんな時間、随分と長く話してしまつたわね。お茶でも入れましょうね」
千鶴はテーブルに手をついて立ち上がった。

台所に行くときやかんに水を入れ、火にかけて、お茶の準備を始めた。数日前、晴美から贈られてきたお中元のお茶の封を切ると、いい香りがした。

晴美は二十歳のとき島を出て、東京の人に嫁いだ。奈々子は同じ島の人と結婚したが、今は島外で暮らしている。今では三人とも孫のいるおばあちゃんだ。千鶴も島の人と結婚し、以来、島を出ることなくずっとここに暮らしている。

「手伝おうか？」
と、居間にいた孫娘が台所に入って来た。

千鶴は「いいわよ」と言ったが、孫娘は水屋から湯呑をふたつ取り出し、テーブルに置いた。孫娘は千鶴のひとり娘の子どもで、今年二十三歳になる。娘の家族は千鶴の家から歩いて五分ほどのところに住んでいて、彼女は秋に結婚を控え、それを機に島を出る。空いた時間が出来てはこうして千鶴の家に寄ってくる。孫娘が横に並ぶと、千鶴はお茶の袋を彼女の鼻に寄せた。孫娘は袋に鼻を近づけ、「んー、いい香りね」と言った。千鶴は羊羹があつたことを思い出し、お茶の袋を彼女に渡すと戸棚の前に行った。「おばあちゃんはどうして、私に清史郎さんの話しをしてくれたの？　ずっと誰にも話してこなかったんでしょ？」と孫娘が聞いた。「そうね、何でかしら。ただ、私もずっと元気でいるわけじゃないわ。彼のこと誰かに知っていてほしいと思つたのかもね」

「大丈夫よ。おばあちゃん、まだまだ元気だもの」

孫娘の気遣いに千鶴は「ありがとう」と答えて、戸棚から出した羊羹を見せ「食べる？」と聞いた。彼女は満面の笑みを浮かべ、うなずいた。子どものもとと変わらない笑顔に千鶴も思わず笑顔になった。お茶と羊羹を持ってふたりで居間に戻ると、

「清史郎さんはいつ、島を出たの？」

と孫娘が聞いた。

「確か、お盆が終わった後、一週間ほど経った頃よ。お別れには来なかったわ。手紙を置いていていつてくれた。『ありがとう』って」

「なんだか、さっぱりしているわね」

「彼はそうやって別れを別れにしないで生きてきたんじゃないかしら」

子どもの頃の千鶴にも分からなかった。何も言わずに去っていった清史郎を孫娘と同じように冷たいと思ったこともあった。けれど、お別れをすれば二度と来られないような気が

したのではないかと、千鶴は随分経ってから
そう思うようになった。

「それで、清史郎さんと約束したの？」

孫娘は羊羹を一口食べてそう聞いた。

「うん。でも、いつか帰ってくるんじゃない
いかと思ってきたわ。私はおばあちゃんにな
ってしまったけど」

清史郎が島を去った日から随分と時が経つ
たことを自分の若かりし頃にそっくりな孫娘
を見ると、千鶴は余計に深く感じた。

夕方、孫娘が帰った後、千鶴は久しぶりに
万次郎さんのお墓に手を合わせに行こうと家
を出た。途中、島の子どもたちと会った。ど
の子も赤ちゃんのときから知っている。子ど
もたちと少し話をして、彼らは「じゃあね」
と可愛げに手を振って去っていった。千鶴は
子どもたちの姿を見送りながら、孫娘の言葉
を思い出していた。
「おばあちゃんがこの島に出て行かなかつた
のは、いつか清史郎さんが来るかもしれない

と思つていたから？」

帰り際、孫娘は玄関で靴を履きながらそう聞いた。靴を履き終え、千鶴に振り返った顔はまるで恋の話でも聞くように茶目っ気のある顔をしていた。千鶴はふふっと笑った。

千鶴が島を出なかつたのは、やはりこの島が好きで、ここで根を下ろし生きていくことが千鶴にとってには自然なことだったからだ。しかし、この島を再び訪れることを生きる糧にしてきた清史郎と出会わなければ、この島の良さや人の良さを深く分かりもせず過ぎしたかもしれないと、千鶴は島の子どもたちの後ろ姿を見つめながらそう思った。

お墓のある雑木林の中に入って行くと蝸が鳴いていた。夏ももうそろそろ終わるだろう。

千鶴の脳裏に昼間窓から見た入道雲が浮かんだ。あの白さは彼がよく着ていた白いシャツそのものの色だったわ：：「と思つたとき、千鶴の足が止まった。蝸の鳴き声が糸を切つたように止み、雑木林の中は時が止まったよ

うに静かになった。
林の中に夕日が一直線に差し込み、万次郎
さんのお墓の前にしゃがむ、見覚えのある白
いシャツの肩にかかっていた。千鶴は呼吸を
整え、ゆっくり近づいて行った。
千鶴の足音に気付いて、彼が振り返った。
まるであの夏が舞い戻ってきたかのように、
全く変わっていない清史郎がそこにはいた。
千鶴はこの光景に驚きつつも、いつかこの瞬
間が来ることを信じていた自分に気が付いた。
同時に「私だと分かるだろうか？」と不安が
よぎったが、清史郎はあっと驚いた顔をした
後、目を細めて笑みを浮かべ、
「やっぱりすぐに船には乗れなかった。今日、
やっと乗れたよ」
と、まるであの遠い夏の日がつい先日のと
とで、そのときの話の続きをするかのように
ごく自然にそう言った。千鶴も、
「私なんて、すっかりおばあちゃんになっち
やっただわ」

と肩をすくめ冗談めかして言うのと、清史郎

は立ち上がり、千鶴のほうを向いて、

「いい時間を過ごしてきたんだね」

と言った。千鶴は深くうなずき、

「ええ、ここはいい島だもの。あなたがあの夏、教えてくれたことでしょ」

清史郎は笑いながら、「そうだったかな」と答えた。

「随分と久しぶりね……、じゃないわね」

千鶴は、

「お帰りなさい」と言い直した。

千鶴の言葉に、浜辺で息を吹き返したときのように清史郎は大きく息をした。

「ただいま」

清史郎がそう答えると、木々が風にさわさわと揺れた。

了